

令和４年度幼稚園学校評価（出雲市立大社幼稚園）

分野	評価項目	評価の着眼点	自己評価		学校関係者評価	評価結果を踏まえた今後の取組
			達成及び取組状況	評価	評価	
教育課程・指導	①学年・学級経営	教職員は、教育目標の達成を目指した学級経営を行っているか。	○園内で独自に「育てたい3つの柱(力)」(気付く力・やり抜く力・関わる力)を設定し、幼児の育ちや教師の取組の視点とした。 ○担任が月ごとに指導計画を作成し、それをもとに保育を行っている。また、実施後には振り返りの話し合いをし、多角的に実施状況を点検し、翌月の計画や実施に活かすようにした。 ※保護者によるA評価(十分されている)が53.3%、B評価(だいたいされている)が43.3%と肯定的評価が96.6%あった。	3	4	①設定した「育てたい3つの柱(力)」を更に具体化し、日々の保育の視点として位置付ける。 ②今後も学期ごとに学級経営案、月ごとに指導計画を作成する。それに基づき反省・考察・見直しを行い、保育の向上に努める。
	②幼児理解	教職員は、一人一人の幼児の発達の姿から課題を捉えて保育を行っているか。	○「すべての子どもをすべての職員で見守る」という理念のもと、日常的に保育の記録を残し、それをもとに職員間で情報交換をしている。様々な場面で幼児一人一人の成長を多面的にとらえ、教師の願いやねらいを明確にしているようにしている。 ○職員会議に幼児について情報交換をする時間を設け、幼児一人一人について成長や課題について共有し、よりよい支援をめざした。 ※保護者によるA評価が60.0%、B評価が36.7%で、肯定的な評価が96.7%あった。	3	4	①日々の保育の記録を残し、一人一人の育ちを見取り、課題も明確に見通しをもって接する。 ②定期的に職員による「子どもを語る会」を行い、補助教諭も含めた情報共有をし、全ての職員が同じ方向性をもって幼児に接する。
	③特別支援教育	特別な支援を必要とする幼児の実態や課題を明確にし、計画的・組織的に指導を行っているか。	○「教育支援ファイル」を作成している幼児については、学期ごとに園内支援委員会を開き、保護者や関係機関と支援を振り返り、次の支援について共通理解を図る取組をした。 ○保育幼稚園課の「巡回相談」で指導を受けたことについては、担任と補助教諭で共有し、支援の方法の改善に活かした。 ○普段から気になる幼児の言動について情報交換をして共有化を図った。その内容が、具体的な支援の方法について共通理解ができるとより効果的な関わりができる。	3	4	①職員が特別支援教育についてより専門的な知識や技能を身に付けるための研修の機会をつくる。 ②学期ごとに管理職・担任と保護者・関係機関とで情報交換をし、共通理解のもとで支援にあたる。 ③「子どもを語る会」を定期的に開催し、現状や課題や改善点について話し合い、園全体の支援体制の整備を図る。
	④人権・同和教育	教職員は、自らの人権感覚を磨き、幼児に人権意識の芽生えを培うように配慮しているか。	○日頃から人権・同和教育の視点を意識し、幼児の背景を踏まえて言葉がけや接する態度に留意するようにしている。また、好ましくない言動があればその場で指導したり、クラスで考えたしっている。その事案を職員間で共有し、同じ方向性をもって指導するようにしている。 ○人権・同和教育をテーマにしたPTA研修会を実施し、園と家庭と一緒に人権について考える取組をした。	3	4	①職員・保護者・地域が共に人権について学ぶ機会をつくる。 ②職員が積極的に研修会等に参加し、様々な事例事例を通して人権について学び、人権感覚を高める。 ③「子どもを語る会」の中で、日々の子どもの姿や職員の接し方について、人権・同和教育の視点をもって話し合い、園全体の人権意識を高める。
	⑤行事	教職員は、行事を幼児の発達を促す機会と捉え、工夫、改善しているか。	○昨年度までの行事の反省をもとに、コロナ禍に対応する内容を検討・工夫しながら進めることが出来た。 ※保護者によるA評価が60%、B評価が40%あり、全てが肯定的評価だった。 ○各行事については、そのねらいを明確にして、各年齢の発達を促す活動になるように工夫した。来年度以降も、ねらいを焦点化して充実した活動にしていける必要がある。	4	4	①各行事のねらいや意義を明確にして実態に応じた計画を立て、事後に振り返りや点検をして次の行事につなげる。 ②各行事のねらいを踏まえて子どもたちへ働きかけ、意欲が継続して取り組めるようにする。
	⑥保幼小連携	近隣の小学校等との連携を密にし、なめらかな接続に努めているか。	○定期的に開催される大社町園長校長会で情報交換をしたり交流活動の検討をしたりしている。 ○特別な配慮が必要な幼児については、個別に見に来てもらい、就学後も支援が継続するようにした。 ○「アプローチャリキュラム」「スタートカリキュラム」の作成や直接授業や保育を見ることを通しての職員間の交流・連携が必要である。	3	3	①園長校長会等で、保幼小中の子どもや職員間の交流を図る取組について検討し、可能な範囲で実施する。 ②小学校の敷地に出かけたり交流の機会をもったりして、小学校への親近感をもたせる。 ③年長だけでなく、必要に応じて、年少・年中の子どもたちについての情報も共有する機会をもつ。
家庭・地域との連携	⑦家庭・地域との連携	幼稚園と保護者、幼稚園と地域（未就園児等）との協力関係はできているか。	○保護者へはクラスだよりや連絡ノートや掲示(ホワイトボード)を活用して園の活動や幼児の様子などを具体的に伝えた。 ○登園時や個人懇談(年3回実施)において、園での様子や子育ての悩みについて直接話した。 ○保護者から相談しにくいという声があり、より丁寧に関係づくりをする必要があった。 ※保護者の肯定的評価が80.0%ある一方で、C評価(あまりされていない)が13.3%、D評価(されていない)が3.3%あり、否定的評価が16.6%あった。	3	3	①迅速で誠意をもった対応に心掛け、保護者や地域との関係づくりに努める。 ②保護者によって対応に偏りが生じないように接し、子どもの成長した面や教員の保育観も伝えながら協力関係を築く。 ③未就園児教室への参加を促すように、各コミセンや子育て支援センターを通して情報を発信する。
研修	⑧研究・研修	教職員一人一人が、園内外の研究・研修の機会を自己研鑽の場として受け止め、進んで研究・研修に取り組んでいるか。	○6月に「第18回出雲市幼稚園教育研究大会」を本園で開催した。それに向けて「育てたい力」や「研究の内容・方法」等について協議を重ねた。協議したことは、実際の保育を通して実践しながら検証や修正をする中で、本園の研究の方向を定めた。 ○研究大会後も、毎月の指導計画や実践を検討し合う時間を設け、幼児の育ちを多角的に捉えてよりよい保育環境を整えることができた。 ○各種研修会に積極的に参加し、自己研鑽に努めた。また、成果を他の職員にも周知して共有化した。	4	4	①各種研修会に積極的に参加し、職員の知識や技能を高める。また、内容によっては他の職員や保護者に知らせ、研修の成果を活かす。 ②市教研大会で取り組んだ方法を、継続・発展させるように、定期的に研究職員会議を開き、実践の振り返りや改善を行う。
組織運営	⑨園務	教職員は、他教職員と協働し、計画的に園務を遂行しているか。	○それぞれの園務について担当は決めてあるが、少人数の職員集団であることを生かし、互いに声を掛け合いながら協働の意識をもって遂行することができた。 ○学級担任の時間外勤務時間数が多い。「働き方改革」を推進する中で、園務の負担軽減や効果的な遂行について見直す必要がある。	3	3	①「働き方改革」の意識をもち、より計画的に円滑に遂行できるように園務の内容の見直しを図る。 ②確実に園務が遂行できるように、協働の意識をもち、互いに声を掛け合い、確認しながら進める。
安全管理・保健管理	⑩危機管理	園の危機管理及び幼児の安全や衛生の管理体制を全教職員が理解し、適切な対応に努めているか。	○学期ごとに避難訓練を実施したり、安全衛生管理の取組をして、幼児の安全で衛生的な生活が送れるように努めた。 ○感染症やアレルギーへの対応については、保護者と連携して職員体制で行うことができた。 ○スクールタクシーの運行については、保護者や添乗員、タクシー会社と頻繁に連絡を取り合いながら安全確保ができた。	3	4	①計画的に内容を検討しながら訓練を行い、職員の危機管理意識と能力を高める。 ②引き続き、健康観察・衛生管理に気を配り、感染症予防やアレルギー対応に努める。
教育環境整備	⑪園地・園舎・遊具等の施設・整備	園地・園舎・遊具等の施設・設備を定期的に点検し、必要な改善・管理を行っているか。	○毎月「安全の日」を設定し、全体で施設内外の安全点検を実施した。異常個所については、教育施設課に連絡し、早急に対応してもらうようにしている。 ※保護者から16.7%の否定的な評価があった。園の施設が老朽化しており、安全が十分に確保できない環境にあると捉えられていると考えられる。	2	2	①「安全の日」を職員と子どもたちの安全意識を高める機会にする。 ②安全点検を確実にに行い、必要に応じて保育幼稚園課や教育施設課と連携して必要な修繕を行う。

【評価基準】 4:十分達成している 3:概ね達成している 2:改善を要する部分がある 1:大いに改善を要する